

保育者養成校における保育内容「環境」

の指導に関する一考察

—キリスト教保育の観点から—

大 土 恵 子・加 藤 三 保

1、はじめに

開学より 116 年の歴史ある大阪キリスト教短期大学は、1905(明治 38)年に設立されたその母体となる大阪伝道館の初めより一貫してキリスト教精神に培われた人材育成を行ってきた。大阪自由メソジスト神学校として開校されたのは 1922(大正 11)年であり、1929(昭和 4)年には聖愛幼稚園は神学校の働きの一部として開設されている。その後、大戦中に全焼したが再建復興し、1948(昭和 23)年に大阪神学校が、また 1952(昭和 27)年には大阪基督教学院を設立し、大阪基督教短期大学神学科として認可された(学校法人 大阪キリスト教学院 2005)¹。

保育科が増設されたのは、1953(昭和 28)年のことである。その後、保育科は、初等教育科、児童教育学科、幼児教育学科と変遷され、学校名も 1988(昭和 63)年現在の大阪キリスト教短期大学と名称変更された。

このように、大阪キリスト教短期大学の建学の基盤となったのはキリスト教精神である。本研究では、キリスト教精神を基礎とする保育者育成がどのように現在の「保育内容」や領域「環境」や保育の環境構成との関わりを持つのかを探ることを目的とする。また、キリスト教保育施設で現在もキリスト教保育を実践されている当事者としての現場職員らのとらえ方を考察し、人的環境としての保育者を養成するにあたっての課題を見出したい。

2、幼児教育の理念とキリスト教

児童中心主義であり、「注入よりは自発性を、言語よりは経験、直観」を重んじたルソー(1712-1778)は新教育の先駆者であるが、彼は「教育の目的も方法もともに自然でなくてはならない」と説いた。彼の理論は、近代教育学の始祖ともいえるペスタロッチ(1746-1827)やフレーベル(1782-1858)に大きな影響を与えた(森上・柏女 2015)²。

ペスタロッチ(1746-1827)は、長尾・福田(1991)によれば、出版後すぐ発禁処分になった

ルソーの「社会契約論」や「エミール」を大学で熟読し影響を受けた。当時のヨーロッパはフランス革命、スイス革命、ナポレオンの侵攻など激動の時代であったため、民衆は平穏な生活をできず、貧困層の児童たちは労働力としてこき使われた。ペスタロッチは戦争孤児のための孤児院兼学校をスイスのシュタンスに開き教育を実践したり、イヴェルドンの学校で一緒に暮らし生徒を指導したりして「生活が陶冶する」という原理を提唱した。イヴェルドンの学校は教育の中心地と言われ、フレーベルやオウエンを含むヨーロッパ各地からの見学者が訪れた。ペスタロッチは「ゲルトルート児童教育法」「白鳥の歌」など多くの著作を残し、質の高い幼児教育は、すべての段階の教育モデルとなるべきだと著述した。また、人間に最も必要なものは教育による知恵の成果だけではなく、神への信仰が平穏の源泉であり、経験主義的手法により目に見えない神の存在への確信を強めさせることを主張した³。

フレーベル(1782-1852)は、小笠原(2000)によれば牧師の子として生まれ、母の喪失、自然への愛、キリスト教信仰を教育理論の基礎とし、様々な遍歴の後ペスタロッチの学園で教師をしながら学び、多くの教育実践を積み、「ドイツ学園」という名の教育施設を開設した。その後、特に幼児教育が重要性を持つと考え、1840年に子どもの園「キンダーガルデン」を開いた。教育遊具「恩物」を開発し、幼児教育の指導者を養成し「人間の教育」「母の歌と愛撫の歌」「幼稚園教育学」等を著した⁴。

マリア・モンテッソーリ(1870-1952)は、ヘINSTOCK(1988)によれば、女性の立場が大変低い時代に、強い宗教的信念をもって差別を乗り越えイタリア初の女性医師となった。その後、イタールやセガンにも学び、障害のある子どもに新しい教育方法を試して大きな成果を上げ特別支援学校の必要性を訴えたので、ローマに知的障害児の施設が設立された。またスラムの保育施設「子どもの家」で働き、多くの教材を開発した。幼児が物事に一番興味を持つ時期つまり「敏感期」に適切な教材を準備した「環境」を整え、幼児が自ら教材で遊ぶときに主体的に成長を遂げることを実証した。この「モンテッソーリ・メソッド」は世界的に有名になり、モンテッソーリはアメリカ、ヨーロッパ各地、インドで講演や教師養成を行った⁵。

これらの教育思想家の時代の欧米はキリスト教との関連が深く、思想家らには精神的なバックボーンとして「神のもとの人間の平等」「隣人を愛すべきこと」「神を恐れ敬い、善行をなすべきこと」という信仰を持つ人が多かった。また、社会的には軽視され、虐げられる場合もあった子どもに対して、新約聖書にあるように「子どもたちを私の所に来させなさい。妨げてはならない。神の国はこのような者たちのものである。」(マルコ 10:13-14)のように、大切な一人の人間として見る視点があったものと考えられる⁶。そのため教育思想とキリスト教の関連は深い。日本に幼児教育を導入したのは、主に明治時代初期に欧

米から来日した宣教師やシスターといったキリスト教関係者であった⁷。そのため、現在でもキリスト教主義の保育施設は、日本カトリック学校連合会・幼保連盟⁸の626園、キリスト教保育連盟・保育施設の約500園がある(東2007)⁹。

3、保育内容「環境」に関する理論と先行研究の動向

保育内容「環境」をめぐる歴史を遡ると、まずイギリスにおける幼児教育の基礎を築いたオウエン(1771-1858)の「環境教育論」が挙げられる。オウエンは、「良き性格は良き環境の内に形成される」(碓井・待井1998)¹⁰、「人間の性格の大部分は幼児期に作られるものであり、さらに環境による影響が大きい」と考え、伸び伸びとした環境の中での幼児の自発的で自由な活動を重視した。書物や玩具を使わず、体育遊びを多くし、直観教授や集団的な音楽活動も取り入れた(森上・柏女)¹¹。

我が国では、1948年「保育要領—幼児教育の手引き—」によって、「出発となるのは子供の興味や要求であり、その通路となるのは子供の現実の生活である。(原文のまま)」ことや「教師はそうした幼児の活動を誘い促し助け、その成長発達に適した環境を作ること」に努めなければならない。¹²と記された。天野(2019)はここには幼児教育の重要性と子ども主体の保育が提唱されていると指摘し¹³、現在の「環境を通して行う保育」につながる文言であることがわかる。

また、保育内容としての「環境」は、1989年の改訂において、それまで6領域であった健康、社会、自然、言語、絵画制作、音楽リズムのうち「社会」及び「自然」を統合した分野が「環境」となった。現行版である2017年版領域「環境」は、2008年改訂された保育所保育指針「環境」まで3回の改定があり、その後2017年改訂された「環境」の保育内容は大きくは変わっていない。このように、現行の領域「環境」は、2008年改定された領域「環境」の内容が、現在も受け継がれている。また、幼保連携型こども園教育保育要領が2014年に制定されたが、これも同様である。

現行の3法令の領域「環境」についての記載をみると「環境」の内容は変わらない。表1に保育所保育指針の領域「環境」の記載内容を示した。「内容」には、「日常生活の中で、わが国や地域社会における様々な文化や伝統に親しむ。」という項目が新たに付け加えられた。「内容の取扱い」においては、社会とのつながりの意識や国際理解の意識の芽生えなどが養われるようにすること。」とされた。少子化や、子どもや家族を取り巻く環境の変化による三間(子どもにとっての時間・空間・仲間)の欠如など、地域の間人関係の希薄化や、国際社会の現状に即したものだと言える。失われていく三間を、保育現場が提供していくことの重要性が示されている。保育の担う役割の変化がうかがえる。

天野は、社会とのつながりを意識するには、自分が周囲の環境に支えられながら生活し

ていることに目を向ける必要があると述べた。また遊びの中から環境との相互作用によって、生活の基礎を培っていく幼児教育とその後の学校教育への繋がりを指摘した。小学校低学年の生活科、また中学年以降の理科や社会、家庭科へと、幼児期の経験が繋がっていくことが期待される。

また、西島(2018)¹⁴は、5領域の中の「環境」について、「自然環境だけでなく、物的・人的・社会現象・文化」を含んだ広い意味での「環境」としてとらえられていることを指摘している。保育所（園）や幼稚園では、広義上の環境とかかわる活動を推奨し、子どもが様々な場面での実体験を積み重ね、地域の資源を活用し、地域交流を進めることが重要視されるとしている。

表 1 保育所保育指針 領域「環境」記載内容

保育所保育指針
3歳以上児の保育に関するねらい及び内容
周囲の様々な環境に好奇心や探究心をもって関わり、それらを生活に取り入れていこうとする力を養う。
(ア) ねらい
① 身近な環境に親しみ、触れ合う中で、様々なものに興味や関心をもつ。
② 様々なものに関わる中で、発見を楽しんだり、考えたりしようとする。
③ 見る、聞く、触るなどの経験を通して、感覚の働きを豊かにする。
(イ) 内容
① 安全で活動しやすい環境での探索活動等を通して、見る、聞く、触れる、嗅ぐ、味わうなどの感覚の働きを豊かにする。
② 玩具、絵本、遊具などに興味をもち、それらを使った遊びを楽しむ。
③ 身の回りの物に触れる中で、形、色、大きさ、量などの物の性質や仕組みに気付く。
④ 自分の物と人の物の区別や、場所的感覚など、環境を捉える感覚が育つ。
⑤ 身近な生き物に気付き、親しみをもつ。
⑥ 近隣の生活や季節の行事などに興味や関心をもつ。
(ウ) 内容の取扱い
上記の取扱いに当たっては、次の事項に留意する必要がある。
① 玩具などは、音質、形、色、大きさなど子どもの発達状態に応じて適切なものを選び、遊びを通して感覚の発達が促されるように工夫すること。
② 身近な生き物との関わりについては、子どもが命を感じ、生命の尊さに気付く経験へとつながるものであることから、そうした気付きを促すような関わりとなるようにすること。
③ 地域の生活や季節の行事などに触れる際には、社会とのつながりや地域社会の文化への気付きにつながるものとなることが望ましいこと。その際、保育所内外の行事や地域の人々との触れ合いなどを通して行うこと等も考慮すること。

4、キリスト教保育施設における実践

キリスト教保育連盟は10年ごとに保育指針を更新し、「新キリスト教保育指針」(2010)¹⁵において、キリスト教保育を「子ども一人ひとりが神によって命を与えられた者として、

イエス・キリストを通して示される神の愛と恵みのもとで育てられ、今の時を喜びと感謝を持って生き、そのことによって生涯にわたる生き方の基礎を培い、共に生きる社会と世界を作る自律的な人間として育つために、保育者がイエス・キリストとの交わりに支えられてともに行う意図的・継続的・反省的な働きである。」としている。また、「環境」は保育者を中心とする「人との関わり」、保育の場を構成する「自然」や「園舎や設備」、園が置かれている「地域社会」などがあるとし、子どもがこのあらゆる環境から刺激を受け、また自分から興味や関心を持って関わることによって様々な活動を展開し、生活の幅を広げ、それらによって充実感や満足感、自己肯定感などと共に失敗や競い合いなどの葛藤を経験しながら成長していくと記している。特に、保育所保育指針に記されていない特有の項目としてあげられているのは「神の存在が感じられる園の環境」である。それは聖画や十字架と言った目に見えるものではなく、保育者が子どもと同じように目に見えない神に向かって、賛美の歌声を上げ、祈り感謝する楽しげで喜びを持つ姿によって子どもの心を解き放っていくという精神的な姿である。そのことによって子どもは自分が大切な存在として受け入れられていることを感じるができる。

キリスト教保育連盟では、その保育指針を現場に具体化するために、月刊誌「キリスト教保育」を刊行し、毎年夏季研修会を行い（新型コロナウイルスパンデミック時期においては動画配信の形をとった）、「さんびか」等を動画配信し演奏の支援を行っている。

また、保育者と園長を対象に定期的に質問紙調査を行い、「第4回 キリスト教保育アンケート報告：2013・2014 調査に基づいて」¹⁶で報告している。保育者アンケートは2013年に実施され、738名が回答した。その主な内容は、以下のとおりである。保育者の経験年数はベテランが多い平均的な構成で、1年目が6%、2-3年目が13.3%、4～7年目が22.1%、8-12年目が17.9%、13-19年目が15.4%、20年以上が24.0%であった。

あなたがキリスト教保育を志した理由は何ですか（3つまで選択可）の問いの結果は、①キリスト教信者だから：22.7%、②キリスト教に関心があるから：3.8%、③キリスト教保育に共感するから：38.8%、④自分もキリスト教保育を受けたから：22.3%、⑤求人があったから：31.3%、⑥養成校での学びで共感したから：13.7%、⑦養成校の先生や就職担当者に勧められたから：9.1%、⑧実習や見学で学ぶところが多くあったから：28.0%、⑨自分自身を生かせると思ったから：14.9%、であった。「キリスト教信仰をもっているかどうか」については64.1%が信者ではなく、35.7%が信者であった。

園長アンケートは2014年に実施され、493名が回答した。「キリスト教信仰をもっているかどうか」については7.5%が信者ではなく、90.5%が信者であった。園長が求める保育者の学びは「子どもの育成や発達について」が最も高く75.7%、ついで「キリスト教保育の理念について」が53.0%であり、キリスト教保育連盟はこれに応える研修をコーディネ

ートするとしている。また、園長がキリスト教保育の特色としてとらえる項目は「一人一人の存在や違いが大切にされる保育」であった。

これらの調査結果を受けて、筆者もキリスト教保育施設の現在の状況や実践内容、保育者の思いを知ることを目的にして、近畿のキリスト教保育施設の保育者を対象に質問紙調査を行い、保育内容について考察した。

(1)調査対象と期間

調査対象は近畿圏のキリスト教主義幼稚園・こども園・保育所のうち、調査依頼に協力して下さった 9 園の保育者である。配布数は 127 枚、回答数は 78 人、回収率は 73.6% であった。時期は 2019 年 8 月～9 月であった。

(2)調査内容

日本でのキリスト教保育の重要性と貢献を探るため、キリスト教保育連盟の 2013・2014 年の調査項目を参考にした質問（経験年数、キリスト教保育を志した理由、キリスト教信者か、礼拝出席）と、保育で大切にしたいことと、「幼児期の終わりまでに育ててほしい 10 の姿」の中から「健康な心と体、自立心、協同性、道徳性、自然との関わり」についてキリスト教保育指針と関連させて尋ねた。

(3)倫理的配慮

書面で、研究目的、調査への回答は自由で拒否権があること、個人情報収集せず統計的に処理を行うことを説明し、アンケート用紙の提出によって説明に同意したとみなした。本調査はプール学院短期大学研究倫理規定に基づき、倫理審査による承認を受けて実施した(承認番号 19003)。

(4)結果

①保育経験年数

保育経験年数のグラフを図 1 に示した。経験 20 年以上の保育者が一番多く 26.9%で、13~19 年目の保育士を合計すると 50.0%になった。これはキリスト教保育連盟の 2013 年調査（以下、2013 年調査と略記）と同様の傾向である。厚生労働省(2020)の「保育士の現状と主な取り組み」¹⁷において私立保育所では勤続年数が短い保育者が多く、14 年以上勤務している保育士が 23.6%であることと比較すると、経験が豊富な保育者の多い職員構成であると言える。

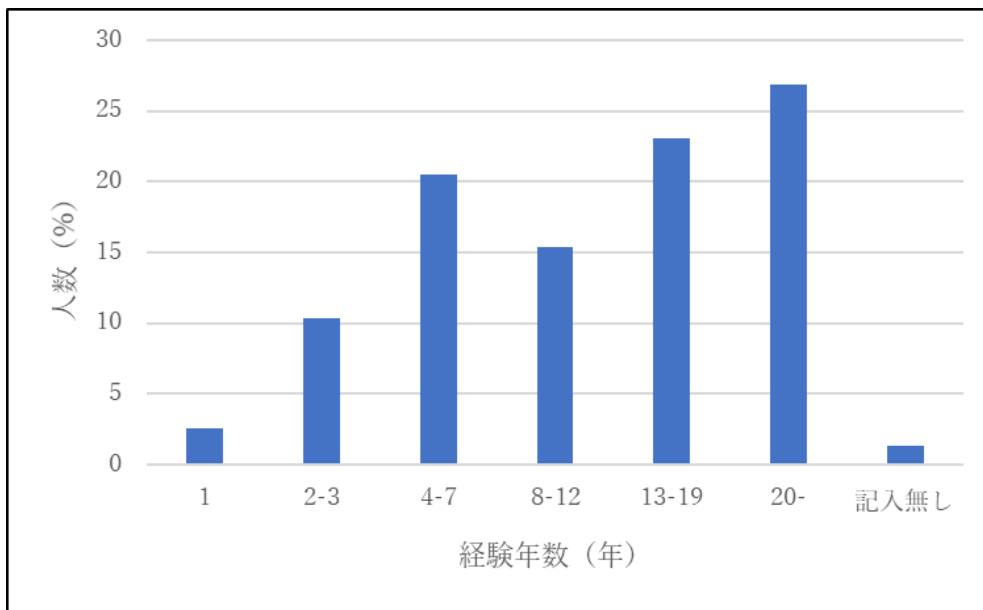


図1 保育経験年数

②キリスト教保育を志した理由

「キリスト教保育を志した理由」は1番多いのが「求人があったから」44.9%で、2013年調査の31.3%より増加している。「自分自身を生かせる」23.1%も2013年調査より増加している。「キリスト教保育に共感する」21.8%がそれに続き、2013年調査の38.8%より低下した。

③キリスト教との関連

「キリスト教信仰をもっているかどうか」については74.3%が信者ではなく、23.1%が信者であった。2013年調査と比較すると信者の割合は12.6%も減少していた。「教会の礼拝に出席している」は26.9%で2013年調査と比較すると18.2%も減少していた。しかし、礼拝に出席している人の割合は、キリスト教信者の割合より高く、キリスト教を求める人の存在が推察された。

これらの結果から、キリスト教保育施設といえども保育者における信者の割合は低下している。しかし、信者ではない保育者も、自分自身を生かせる職場だと考え、キリスト教保育に共感してキリスト教保育を行っている姿がうかがえた。新キリスト教保育指針にも「かつてキリスト教保育はキリスト教信者によって担われてきた。しかし今日ではキリスト教保育を大切にしたいと考える信者と未信者との協働によって担われている。」と記されているとおりである。そのため、キリスト教主義の養成校でのチャペルタイムや、「キリスト教保育」の授業が、就職後において重要で意義があるものと考えられることができる。

④ 幼児期の終わりまでに育ってほしい 10 の姿との関連

「幼児期の終わりまでに育ってほしい 10 の姿」の中から「健康な心と体、自立心、協同性、道徳性、自然との関わり」についてキリスト教保育指針に基づいた保育がなされているかを尋ねた。結果は、「子どもが互いの違いを認めつつ一緒に過ごす努力をし、そのことを喜びとする」協同性について、「このように保育している」という回答が最も多く 42.3%であった。次に、健康な心と体について「神が心と体を創ってくださり、神の愛と恵みにより育っていくこと、神に創られた体を大切にする」について、「このように保育している」が 39.7%であった。次に「環境」に関連して尋ねた「自然との関わり・生命尊重」で「自然や世界を神による恵みと受け止め尊重する」について、「このように保育を行っている」が 37.2%であった。この質問の自由記述の中で、キリスト教保育では折に触れて「祈り」が行われるが、その中で身近な生き物や自然などの環境について感謝することが多いことが記されており、キリスト教保育と領域「環境」との関連が示唆されていた。

⑤ 保育で大切にしたいこと

次に、保育者の「保育で大切にしたいこと」についての自由記述を分析した。59 人の自由記述を User Local AI テキストマイニングで集計し、「神様、神、イエス様」「一人ひとり、一人一人」など同義と判断できる単語は出現回数が多い単語に読み替えて再集計したところ、複数回数出現した単語として名詞 14、動詞 15、形容詞 2 が抽出された。出現回

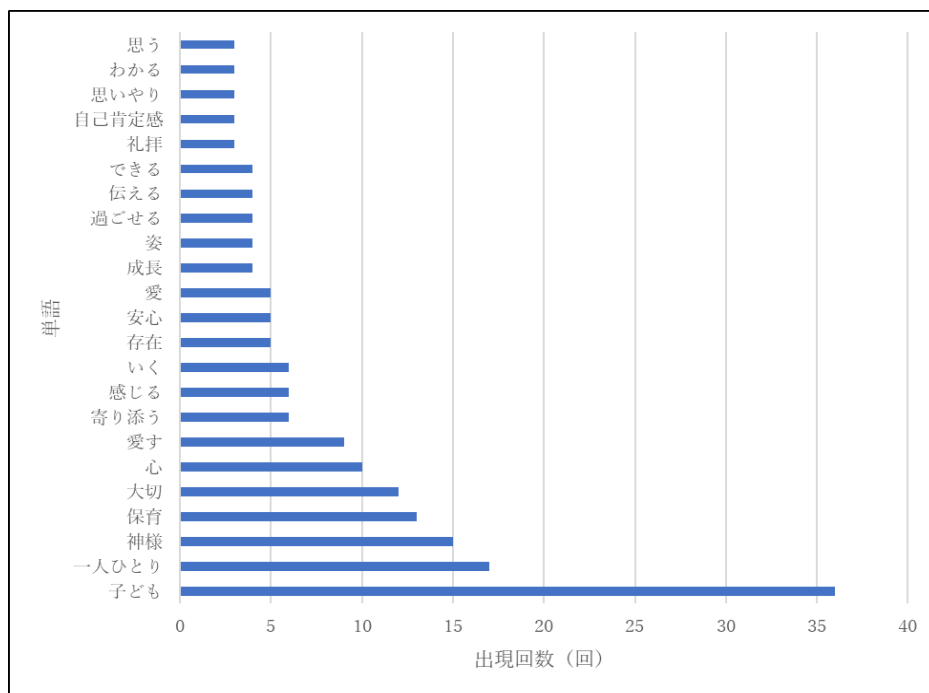


図 2 保育で大切にしたいこと（自由記述からの抽出）

数 2 以下を切り捨て、グラフ化し、図 2 に示した。出現回数が上位の単語から、「子ども、一人ひとり、神様、保育、大切、心、愛す」となった。このグラフから、前述のキリスト教保育指針の目標にそって、子ども一人ひとりが大切にされる保育が具体化されていることが推察できた。また、②キリスト教保育を志した理由において、たまたま「求人があったから」キリスト教保育施設に就職したという 44.9%の保育者にとっても、それは偶然ではなく神の導きであり、園内で先輩の保育者が実施しているキリスト教保育の姿勢が日々の保育の中で後輩の保育者に継承されていったのではないかと推察された。

5、教会付属幼稚園における「環境」の構成

「4、キリスト教保育施設における実践」の調査協力園の一つ A 幼稚園を 2021 年 9 月に訪問し、「環境」に対する調査と見学を行った。A 幼稚園は、キリスト教会の教会教育と地域貢献を目的として、モンテッソーリ教育によって子どもが豊かな人格を形成するために 2002 年に設立された。日々の保育は、礼拝で始まり、その後、子ども一人ひとりが興味を持った教具に取り組む。また、通常の保育施設で行われる設定保育も行っている。園長は牧師で、保育士資格とモンテッソーリ教育のディプロマを持つ保育者が保育を行っている。保育者は全員がキリスト教信者である。

モンテッソーリ教育はこの理論を提唱したマリア・モンテッソーリが設立した国際モンテッソーリ協会(AMI)や、国内では AMI に認可された日本モンテッソーリ協会(JMI)が資格を授与している。100 年以上にわたり世界の各地で実践されてきた教育法であるが、国内の保育士養成校では長崎純心大学しかモンテッソーリ教員免許状の授与カリキュラムを有していない。そのため多くの保育者にとっては一般的ではなく、特殊で閉鎖的な教育法との印象を受ける可能性がある。

ヘイントックはモンテッソーリ教育について「私たちの教育の最も大きな特徴は環境構成に力点が置かれていることです。発達段階に適した環境を準備するなら、子どもは環境の助けによって自己を形成します。「子どもの家」の設備は子どもの要求にかない、子どもの体格に合うように作られ、子どもの知的発達に適した教具が備えられる（モンテッソーリ・メソッド）」と述べ、金丸・小田(2017)¹⁸はモンテッソーリ教育において保育者は適切な環境を構成し、その環境と子どもをつなぎ、子どもの成長発達を援助する役割を持つと述べた。

金丸らは、モンテッソーリ教育法には「誰にでもすぐ取り入れることができる子どもの見方と、それに対する大人の役割が示されている」と評価する。モンテッソーリ教育の特徴的な面は、感覚・言語・算数・文化・日常などの教具を保育室に配置し、一人ひとりの子どもが主体的に環境と関わり、その時に自分が興味を持った教具で心ゆくまで

遊ぶことによりそれらの教具から自然に学んでいくことにある。子どもにはモンテッソーリが「敏感期」と呼ぶ子どもの好奇心に適したレディネスがあり、その時期に納得するまで遊びこむことによって自ら成長していく。この保育法は一斉保育ではなく3・4・5歳児縦割りクラスで、子どもが個々に活動を行う。保育者はその教具の提供法を学び、子どもを援助する。モンテッソーリ教育原理と幼稚園教育要領には一致点が多くあり、環境による教育を行うためにモンテッソーリ教育が参考となると考えることができる。図3から図8にモンテッソーリ教具の一部とその説明を図示した。図3は日本専用の文字教材の50音表である。いつでも視覚的にひらがなに親しむことができ、その下にはひらがなに触れたり、なぞり書きしたりできる教材が配置されている。図4は地球儀と世界各国の国の形のパズルである。おりしも日本でオリンピックが行われていた時期で、子どもたちが自然に外国の名前や場所、国旗などに興味を持ったと言うことであった。図5はピンクタワーという名称の積み木であり、等間隔に辺の長さが短くなる立方体の積み木である。子どもはこの積み木を大きい順に積むことで楽しみながら大小の感覚を身に付けることができる。図6と図7は算数教材である。ビーズや積み木で遊びながら自然に1,10,100,1000の数の単位や量が実感できるように工夫されている。図8は着衣枠で、木枠に服に模した布が張られボタン、リボン、スナップ、ホックなどが縫い付けられている。木枠の布のボタンやスナップを外したり、掛けたりすることで着脱の練習をすることができる。

A 幼稚園で、子どもたちが自主的にこれらの教具に取り組んでいるときは、子どもたちがその遊びに集中するため、一般の保育施設の自由遊びと比較してとても静かであった。全員が違う遊びをしているのに、一人ひとりが嬉々としてその遊びに集中し、自分が納得するまで遊びこむと、満足してその遊びを終了する。ある子どもは文字に興味があり、何度も文字に関する教具を使い、ある子どもは日常の教具の小皿の豆を小さいトングで隣の皿に移す。この保育の様子を見学して、子どもたちが元々自らの内に持っている興味と力で自ら成長していく様子を見ることのできた。

モンテッソーリ教育を行っていない園でも、書物・論文・DVD・園見学等によりモンテッソーリ教育の教育法を取り入れ、子どもの発達段階に適した玩具や教材などの環境を整えれば、自由遊びなどの時間に子どもたちが興味を持った遊びに取り組むコーナーを準備することができると思われる。「環境」の保育を深めるために、非常に参考になる教育法であると言える。

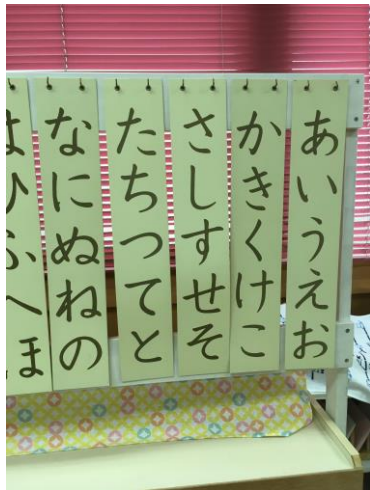


図 3 ひらがな 50 音



図 4 地球儀、国パズル



図 5 ピンクタワー



図 6 十進法ビーズ



図 7 算数



図 8 着衣枠

6、キリスト教保育養成校における「環境」教育の実践例

キリスト教主義である B 短期大学幼児教育保育学科では、保育者として環境教育を行う力をつけさせるために、敷地内の農園で、学生に自ら計画を立てさせ、野菜の栽培、収穫、調理を行う実践的な授業（講座名：生活園芸、生活創造 A,B）を行ってきた。B 短期大学は都市部にあり、農業を経験している学生は皆無に近く、野菜、土、虫のいずれにも親和性が無く積極的に作物や土に触ることのできる学生は少ない。上山・大土・奥（2020）¹⁹によれば、授業の到達目標は以下の 5 つである。

- ①自らの計画で野菜を栽培し、収穫し調理することによって、自分の人生や生活、進路の指針を探求する力(=生活創造力)を身につけるとともに命の大切さを理解する。

- ②野菜栽培や、里山の観察及び植物の食べ方や加工法の習得を通じ、環境、食糧問題の重要性を理解する。
- ③栽培活動や調理が保育や幼児教育の一手段となることを理解する。
- ④旬の野菜やそれを活用した調理で、季節の多様性を実感する。
- ⑤健康な心と身体を育てるための「食」に関する知識・技術を身に付ける。

保育所保育指針では、環境領域のねらいが①身近な環境に親しみ、触れ合う中で、様々なものに興味や関心をもつ。②様々なものに関わる中で、発見を楽しんだり、考えたりしようとする。③見る、聞く、触るなどの経験を通して、感覚の働きを豊かにする。と記されている。多くの保育施設では畑で野菜や花を育て、子どもと一緒に収穫体験や、料理などを行っている。しかし上山によれば、保育者自身に栽培や収穫の経験が無ければ、保育者となってから本来の「環境保育」や教育の効果を上げることができない。

本授業は、本来は一年を通して、季節に応じた作物の植え付けや収穫、調理実習を行い、季節の行事を経験する事を計画していた。しかし、2020年の前期は新型コロナウイルス感染症の広がりのための第1波の緊急事態宣言期間となり、ほとんどの授業が遠隔授業となった。また、会食による感染を予防するために調理実習は全面中止となってしまった。そのため、3人の教員により学生に対して、種まき・植え付け・収穫・調理などを、畑や、調理実習室から動画配信することにした。実施してみると畑にはwifiが無く、パーソナルコンピュータをインターネット接続することができなかつたため、スマートフォンを用いることにし、大変苦勞して動画配信を行うことになった。学生には大学のポータルサイトで事前に授業のレジメを配信し、授業当日はスマートホンの動画を視聴させ、その後、中継から学べたことと、保育への応用についてレポートを作成させた。当時はわが国で最初の緊急事態であり、学生も不安と孤独とストレスが強い様子であったが、レポートには授業の中継によって友達とも話すことができ、家でもできる工作を作成したり、録画して見直したりできて良かったとの記入があり、楽しく良い学びができたことがうかがえた。

主なオンライン授業内容は、色紙を使った花束作り、ストロー（畑では麦を栽培しており、本来は麦わらを用いる予定であった）を使ったヒンメリ作り、ジャガイモを使ったでんぷん作り、苗の植え付け、種まき、野菜の管理を行った。作成した課題は学生から画像で提出させた。中でも、一般的にはいつでも販売しているが実際の畑ではほんの一時期しか収穫できないイチゴを収穫し、料理番組のように手早くショートケーキを調理し、教員が食べて見せた授業の中継は、学生から大変羨ましがられ、緊急事態が明けた後はもうイチゴの収穫ができなかつたため、後々まで語り草になったことが印象的で

あった。

受講生の感想では、オンライン授業による時間的な余裕、自粛期間中の友人との交流、菜園の状況の把握ができスムーズに対面授業に移行できた、画面を録画し、わからない所を見直すことができたなどのメリットがあげられた。

その後、後期は対面授業ができるようになり、苗の植え付け、雑草抜き、収穫等を対面で行うことができた。実際に農場に来ることができたため、学生と一緒に畑の昆虫を観察したり、林でさえずる鳥の名を教員が教えたりもできた。大学がキリスト教主義であるため、季節行事として、クリスマスにはクリスマスリースを作成した。農場は里山に隣接しており、自然のクズの蔓が繁茂している。教員と学生だけではなく事務職員も一緒になり蔓を取る所から始め、リースを作り、教員の準備した様々なドライフラワーで飾り付けた。大学にはチャペルがあり、クリスマス礼拝も行われるため、学生のリースをチャペルや事務室に飾ることができた。また、田んぼで栽培した稲の藁があったため、日本の習慣を尊重して、藁をなつて輪状にし、しめ縄のような現代的なお正月飾り（リース）の作成にも挑戦した。学生はこれらの造形に大変積極的に取り組み、教員の想像を上回る独創的な作品が数多くでき、作品はキャンパスを彩った。

上山は、演習を必要とする授業で受講者が少人数の場合は、オンラインでも対面授業と遜色のない授業効果を上げることができたばかりか、回を重ねるにつれ、自粛期間中に生活リズムを崩して授業に遅刻していた学生も授業開始時に出席できるようになったという効果があったという。その時代に学生が使用しているツールを効果的に使い臨機応変に授業を実施することが、授業の目標のみならず新たな手法を提示する教育効果につながると述べている。本授業の受講学生は、保育現場において野菜の栽培等に戸惑わずに自信をもって取り組んでいるものと思われる。

7、結論

本研究では現行の保育所保育指針や保育者養成校の実践報告やキリスト教保育施設の実践例を示すとともに、キリスト教主義の保育施設職員らへの質問紙調査によって、キリスト教精神を基礎とする保育者育成について、現在の「保育内容」や領域「環境」や環境構成とのかかわりを持つかを探ってきた。

「2.幼児教育の理念とキリスト教」では、我が国における幼児教育導入の歴史を振り返り、その主たる指導者が明治時代初期に欧米から来日した宣教師やシスターといったキリスト教関係者であったこと、また、キリスト教主義の保育施設が日本の幼児教育の先陣を切ってきたという事実を示した。「3.保育内容『環境』に関する理論と先行研究の動向」では、我が国の保育内容『環境』についてその成り立ちと、現行の保育所保育指

針での内容について述べた。「4. キリスト教保育施設における実践」「5. 教会付属幼稚園における『環境』の構成」では実際のキリスト教主義の保育施設職員の意識や環境構成の実例を示した。「6. キリスト教保育養成校における『環境』教育の実践例」では、キリスト教系保育者養成校の、コロナ禍にあっても保育の現場につながられるようなオンラインでの取り組みやその効果について報告した。

小見(2021)²⁰によれば、「キリスト教保育」とは、「キリスト教の理念に基づいて幼稚園、保育園、認定こども園等でなされる子どもへの教育、ならびに乳幼児期の子どもを保護して育てること」をいう。またその中心的な命題は「キリスト教保育の原初でもある福音書に記されたイエス・キリストの子ども理解ということになる。」と指摘している。また、キリスト教保育の原点は「イエスの子ども理解」と子どもへの姿勢は、「イエスが子どもを祝福された記事（新約聖書マルコ 10：13-16、マタイ 19：13-15、ルカ 18：15-17）に代表され、キリスト教児童観の中核をなすもの」であることを指摘している。

現行の保育所保育指針の総則(3)「保育の方法」には「子どもが自発的・意欲的に関わられるような環境を構成し、子どもの主体的な活動や子ども相互の関わりを大切にすること」としている。またその環境による保育の説明として「保育の環境には、保育士等や子どもなどの人的環境、施設や社会などの物的環境、さらには自然や社会の自称などがある。保育所はこうした人、物、場などの環境が相互に関連し合い、子どもの生活が豊かになるよう、次の事項に留意しつつ、計画的に環境を構成し、工夫して保育しなければならない。」としている。無藤ら(2017)は、中でも「人的環境」が重要であると指摘し、「保育士らは自らを環境と感ずる姿勢が大事」であるとした²¹。

現在日本におけるキリスト教信者は、全人口のうちの1パーセント²²にも満たない。しかし、保育や教育の土台となる部分にキリスト教思想の大きな影響があることは、これまで述べてきたとおりである。また、今回使用した調査データでも、キリスト教主義の保育施設の保育者の中で、キリスト教信者が2割を超えていることを考えると、やはり保育現場におけるキリスト教の影響は一般社会より大きいと思われる。保育施設において、キリスト教信者と未信者が協同してキリスト教保育に取り組んでいることから、本学の建学の基盤でもあるキリスト教精神が日本社会のキリスト教系保育施設の中で実践されていることがうかがえた。

新キリスト教保育指針では、キリスト教保育のねらいを以下の様に記している。

- (1)子どもが、自分自身を大切なひとりとして受け入れられていることを感じ取り、自分自身を喜びと感謝を持って受け入れるようになる。
- (2)子どもがイエスを身近に感じ取ることを通して、見えない神の恵みと導きへの信頼感を与えられ、「イエスさまと共に」毎日を歩もうとする思いを持つようになる。

- (3)子どもが、互いの違いと認めつつ、一緒に過ごす努力をし、そのことを喜びとするようになる。
- (4)子どもが、心を動かし、探求し、判断し、想像力を持ち、創造的に様々な事柄に関わるようになる。
- (5)子どもが、私たちの生きる自然や世界を神による恵みと受け止め、それらの事柄に関心を持ち、自分たちのできる事を考え、行うようになる。
- (6)子どもが、してはいけないことをしようとする思いが自分の中にあることに気づき、そのような思いに負けない勇気を持ち、行動するようになる。

保育内容「環境」の視点からキリスト教保育のねらいについて考えるとき、ねらい(5)が環境と関わり、人的環境としてはねらい(1)(2)が関係すると考えられる。身近な自然や動植物、季節の変化や生命の尊さなどはいずれも人間の努力だけで創造し生み出せるものではない。私たちの生きる自然や世界を神による恵みと受け止める視点がキリスト教保育のねらいで示されている。

キリスト教信者が、1パーセントにも満たないのは本学の学生についても同様だと考えられる。しかし、キリスト教の建学の精神に基づき、今もなお学生と教職員がともに毎週の礼拝を守り続ける、保育者の養成校としての本学が果たす役割は重要である。学生は学内のあちらこちらで聖書の言葉を目にする環境で学び、毎週チャペルタイムで祈り、賛美し、聖書のメッセージを耳にしている。この働きは土台にキリスト教の影響がある保育や教育を目指す学生を養成することにおいて、先達の保育思想につながっていく養成教育の環境だと考えられる。また、このような学びの環境こそが、ノンクリスチャンの学生の内面に働きかけ、キリスト教やその保育、また教育文化を身近に感じさせる。そして、その学びの環境は、保育の実践現場において「環境を通して行う」保育実践につながるものであると思われる。

なお、本研究の課題は、授業「キリスト教保育」についてはまだ十分な調査・検討を行えていない。今後は本学のみならず、他大学における「キリスト教保育」の授業についても検討を行うことが課題である。

引用・参考文献

- 1.大阪キリスト教学院百年史 05、32-49.64. 72-83 頁。
- 2.森上史郎・柏女霊峰「保育用語辞典」第8版、ミネルヴァ書房、2015年、51頁。
- 3.長尾十三二・福田 弘「ペスタロッチ」清水書院、1991年、参照。
- 4.小笠原道雄「フレーベル」清水書院、2000年、参照。
- 5.ヘインストック「モンテッソーリ教育のすべて:人、著作、方法、運動」平野智美訳、東信堂、

- 1988年、参照。
- 6.大土恵子「キリスト教保育と日本幼児教育—教育方法と教育課程の導入の観点から—」、『桃山学院教育大学紀要エレノア』第1号、2019年、71-82頁。
 - 7.キリスト教保育連盟「ともに育つ保育入門」キリスト教保育連盟、2018年、16頁。
 - 8.日本カトリック学校連合会
<https://www.catholicschools.jp/member/kindergarten.php>(2021年9月2日閲覧)
 - 9.東 義也「キリスト教保育の現場における保育者の信仰と理解について」、『尚絅学院大学紀要』、54、2007年、127-137頁。
 - 10.碓井隆次・待井和江「保育小辞典」〔改訂版〕1998年、参照。
 - 11.森上史郎・柏女霊峰「保育用語辞典」、第8版、ミネルヴァ書房、2015年、410頁。
 - 12.新井 洸「乳児保育の原点に立ち返って：文部省「保育要領」（一九四八年三月）を読む」季刊保育問題研究 271、2015年、29-52頁。
 - 13.天野佐知子「幼稚園教育要領の変遷に関する一考察— 小学校家庭科を見据えた保育内容『自然』及び『環境』 金沢星稜大学、『人間科学研究』、第12巻第2号 2019年、参照。
 - 14.西島（黒田）宣代「新版 保育内容総論」、監修者谷田貝公昭・石橋哲也 2018年、参照。
 - 15.「新キリスト教保育指針」キリスト教保育連盟、2010年、参照。
 - 16.キリスト教保育連盟：キリスト教保育研究委員会「第4回キリスト教保育アンケート報告 2013・2014 調査に基づいて」2017年、参照。
 17. 厚生労働省. (2020). 「保育士の現状と主な取り組み」23頁。
<https://www.mhlw.go.jp/content/11907000/000661531.pdf>
(2021年9月18日閲覧)
 - 18.金丸雅子・小田進一、「幼稚園教育要領に見られるモンテッソーリ教育のエッセンス：環境による教育を実践するために」、『北海道文教大学研究紀要』、2017年、41-49頁。
 - 19.上山博・大土恵子・奥克太郎「演習授業における SNS ビデオ通話機能活用の試み」、『プールの学院短期大学研究紀要』第61号、2020年、47-54頁。
 - 20.小見のぞみ「キリスト教保育とは何か：その子ども観と保育理論」、『聖和短期大学紀要』、7号 9-19頁。
 - 21.無藤 隆・汐見稔幸・砂上史子『ここがポイント3 法令ガイドブック』フレーベル館、2017年、85頁。
 - 22.宗教統計調査結果—文化庁 文化部 宗務課(2014)
https://www.bunka.go.jp/tokei_hakusho_shuppan/tokeichosa/shumu/pdf/h26kekka.pdf
(2021年9月9日閲覧)